

博士論文審査結果報告書

学籍番号 1729022019

氏 名 竹内陽子

論文審査員

主 査（職名） 大桑麻由美（教授）



副 査（職名） 田中浩二（教授）



副 査（職名） 加藤真由美（教授）



論文題名 Development of Professional Care Program for Nurses in Dementia Wards and its Educational Effects (認知症病棟の看護師における専門的ケアプログラムの開発と教育効果の検証)

論文審査結果

【論文内容の要旨】

看護師の認知症ケアに対する知識やスキルの向上および苦手感の改善は世界的な課題である。研究目的は、認知症病棟の看護師が活用する専門的ケアプログラムを開発し、その教育効果を検証すること。プログラムは、専門的知識の理解度と自己効力感の向上をねらいとし、Bandura の自己効力感理論と Knowles の成人学習理論を基に、苦手意識を改善し学習動機を引き出す導入、認知症ケアの専門的知識（認知症のタイプ別病態に基づくケア方法）がもてるための講義、専門的知識に基づいた実践体験の共有（成功体験等）から構成された。研究デザインは 3 ヶ月間に渡る準実験型介入研究であり、3 つの病棟を 1 つの介入群（プログラム群）と 2 つの対照群（知識習得のみ群・通常ケア群）に無作為に振り分けて検証した。効果は対応のある t 検定や二元配置分散分析により、知識習得状況はテキストマイニングの共起ネットワーク分析により解析した。金沢大学医学倫理審査委員会（承認番号：883-1）の承認を得て実施した。参加者は病棟看護師であり、合計参加率は 89.5%、分析対象者はプログラム群 17 名、知識習得のみ群 16 名、通常ケア群 18 名であった。3 群の基本属性に有意差はなかった。結果、プログラム群は、専門的知識の理解度において知識習得のみ群の 66.9% に対して 81.6% と高く、対照群よりも専門的ケアの実践に対する自己効力感は有意に向上し、9 割以上の者が認知症ケアへの自信を向上させていた。共起ネットワークから、タイプ別の病態や特有の症状について理解されていることが明らかとなった。以上のことから、学習へのレディネスが整えられ、専門的知識が提供され、その知識に基づいた実践の繰り返しと成功体験等が共有されることで、専門的ケアをより深く理解し、認知症ケアへの自己効力感が向上することが示唆され、本プログラムは実践の場で使用可能と考えられた。

【審査結果の要旨】

認知症ケアの教育開発は看護師の態度やコミュニケーションスキルについてが主であり、認知症のタイプ別による専門的な知識提供を教育に取り入れ、かつ認知症ケアへの自己効力感の向上をねらいとした開発研究は世界的に新規である。本研究成果は、本プログラムにより看護師が適切なケアを実践できるようになることから、認知症の行動・心理症状の制御や看護師の認知症ケアの苦手意識の改善に貢献すると考えられる貴重な知見となった。公開審査会では質疑応答を適切に答えていた。以上、学位請求者は本論文の論文審査及び最終試験の状況に基づき、博士（保健学）の学位を授与するに値すると評価する。